



同志社人物誌 (73)

住 谷 悦 治

岡 光 夫

(大学名誉教授)

一

住谷先生の履歴書を拝見すると、一九三三年八月から三七年の三月までの四年間と一九四二年の七月から四九年七月までの七年間で、両者合わせて一〇年余の期間に教職を離れている。それは先生の自由意志で教職を離れたのではなく、当時の支配者の思想弾圧が激しく強制的に離職を勧告されたことによるものである。これは先生の年齢で三八歳から五四歳までの期間である。この期間は研究者にとっては、自分の研究が稍々先が見えてきて、あと一〇年もすれば

完成に到達するという重要な期間である。またこの期間は家庭的に見れば子供さんの成長期で、大学や高校に入り教育費の高む期間であり、精神的に経済的にも人生で一番大切な時期であったと思われる。

先生の学術的著書や随筆類は後で触れるが、膨大なものである。それを全部私が拝読したとわいえないが、私の拝見した限りでは生活の苦るしみに触れたものは一つもない。生活のやりくりは奥様が大変であったと思われる。先生は酒を飲まなかったのであるが、この時代に学生が数人ぐらい度々押しかけたり、同僚の先生方を御自宅

にお呼びになり御馳走をしたりして、その出費も大変であったと思われる。

太平洋戦争の敗戦によって、軍隊から学園への道歩んだ私や友人達の経済生活は惨憺たるものであった。このような状況下で家族をもった研究者が職を離れたことはもつと大変であったと思われる。

先生はその苦難の道歩みながら、外に向つては無言であったが、先生の私的メモにはそれが記されている。一昨年刊行された『回想の住谷悦治』は遺家族の方の編集によるものであるが、その書のグラビアに「執筆で生活を支える。そのメモ(一九二一年頃)」とあるが、そのグラビアの先生の説明文には「帰朝後の原稿」とあり、その内容は一九三四年以降であるから、一三年ほどの時代差があり、それは作製者の説明ミスであろう。これによると一九三四年五月から十二月までの八ヶ月で実に五四稿の原稿を執筆されているから月間に七稿が執筆されている。その掲載は各種の新聞、学会雑誌などで、おそらく不眠不休の状況であったと思われる。

ところが第二回目の弾圧による一九四二年から四九年までの七年間は戦時下の思想

弾圧がきつく、戦争による破壊も激しく出版機関が壊滅し文章生活者の生活が大変だった時代でもあった。

二一

今から四六年前の一九四九年の頃のこと、当時私は北大を卒業して東大の大学院生であったが、当時は終戦から日があまり経っておらず、今と違って出版物も少なく、古本屋で購入しないと、思うように勉強の出来ない時代であった。その年の年末もせまった、ある寒い日の事である。東京の九段下のある古本屋で、住谷悦治著『日本経済学史の一齣』（日本評論社）なる書籍に接したので早速に買求めた。購入後何日かかけて読んだのであるが、私の研究のテーマと少し離れていた事もあり、今ではすっかり内容を忘れてしまった。

この原稿を草するにあたり、それを捜し出して印象をあらためたいと思い、書齋をさがしたが日頃の整理がわるいので見当らなかつた。私はその後、大学院を終え一九五四年四月に兵庫農科大学（現神戸大学農学部）に赴任し五か年間をすごしたが、同志社大学の日本経済史担当の逆井孝仁氏が

立教大学に移られることになり、同氏の推薦で同志社に来ることになった。

逆井氏から住谷先生に私の事をよろしく指導して頂くよう頼むという伝言があったようので、私が同志社に赴任前に、住谷先生の心のこもった達筆の書翰を戴いた。この書翰をその後大切に、時々出して読んで反省の材料としていた。これも内容を今回紹介したいと思ひ、さがしたが出てこなかつたのは残念である。

同志社に赴任して住谷先生の研究室に挨拶に伺ったら今迄先生の著書を拝見したり、御手紙を拝読しての印象と全くちがひ、博学の優しい紳士であったのにはびっくりした。その上に次から次へと社会科学や女性史のお話をうかがい面白く、時間を忘れていに長居になつて御迷惑をお掛けした思ひ出がある。私はこのような先生のおられる同志社に赴任したことに幸福感を感じ、先生のためならばどんな事でもしようと心に決めた。だが今から考えると事はそのように運ばなく、先生に御迷惑をかけた事が多々あつたと反省している。

私の研究室が先生の研究室の真向いの位置にあつたので、私が講義のために学校に

来る日は、ほとんどこられて研究室におられたようので、時には御邪魔をして、いろいろと指導をうけた。そういう関係から次のようなことが生じた。

私が同志社に赴任した年の事であるが、先生は夏休みに外国旅行をされた。当時ゼミの四年は夏期休暇に就職試験をしていたようので、今と違ってほとんどの学生が就職先への推薦状を担当者が書くことになつていた。ところが先生は夏期休暇に外国旅行されたので、住谷ゼミの学生の推薦状の記入を先生は私に委任されたのにはまいった。というのは私は住谷ゼミの学生とは一度も逢つたことがなく、学生の性格について何一つ予備知識がなかつたからである。

当時住谷ゼミは三〇人近く居り、責任をもつて推薦状を書くために、いろいろと家庭状況や学生生活などを長時間にわたり面接して聞いて作製した。そうすると一日に三人もくると夕方近くになり、当時は今と違って企業数も少なく、就職難（ここ一、二年と同様に）の時代であつたから一人で数社を出願する場合もあつた。何とか就職に成功させてやりたい気もあり、落ちた私の責任ということで詳細に記入した。

後からの先生の話では大体の学生が希望した所に決まったということ聞いて一安心したことを覚えてる。この経験は、以後の私の教師生活にプラスになったのであるが、夏休み中の研究はふっとんでしまった。

もう一つ忘れられない先生の思い出がある。それは総長になられてからの事である。私の酒好きは学内でも有名であったが、二部の授業が終わると河原町に出て飲んで帰宅するのが習慣となっていた。ところが私と同じ酒好きの某教授がいて、いつしか二部の授業が終わると同道するようになった。ある時その教授がいうには、勉強して著書を書いたが、出版してくれるところがないとなげいていた。私の知っている出版社は社会科学系系統が多いので、文学系出版は思い当らなかった。それから何か月が経ってから、総長にこの話をしたところ、自費出版なら、月賦で支払って呉れば何とか世話してあげるといふことで、その話を当人に話したところ、大変に喜ばれ、その書がその道の出版社として有名なところ出版された。

このようなことは総長の業務でないが、本を出すことを苦にしている研究者を見聞

するとじつとしてはおられなかったようである。もう二〇年も前の事で、その本を書いた人も一〇年前余りに亡くなったが、住谷先生の一面を思い出し懐しきを感じる次第である。

二

先生は一九六六年三月に停年となられたが、古稀記念として経済学会から記念論文集を出すことが慣行となっていた。当時私は『経済学論叢』の編集委員の一員であったので、その編集にとりかかったのは一年前の一九六五年の七月からである。

この記念論文集には先生の著作目録を付すことが慣行となっていたが、その作製は先生の全著作が多いので夏期休暇を終えても、その作業が終わらなかつた。著作が大

小を合わせて四一冊、訳書九冊、論文一一七、書評・紹介一一、共著・共編五、人物評論九二、随筆一七八、その他に新聞掲載文(略す)。この作製には当時助手であった島一郎君にも手伝ってもらい、毎日夏休み期間中住谷宅に通いカードにとった。当時はまだ夏期に冷房していなかつたので、暑い毎日を押しに仕舞い込んであつた昔の論

文を出して戴きカード化したのである。その間に今は大学を卒業して社会人となっておられるお孫さんが四、五歳頃ぐらいで、時々作業をしている応接間に出現して、あばれ込んだことなど懐しく、昨日のこのように思われる。

先生と私は専攻を異にし、しかも先生の主要な著作を全部拝読したわけでもないが、社会的評価が高いのは『日本経済学史』(ミネルヴァ書房)と『河上肇』(吉川弘文館)であるが、先生の著作目録を作製してみても、先生には隠れた力作のあることを発見した。それは先生が四〇歳末期にも書いた『三瀬諸淵の研究』(『日本特種産業の展相―伊予経済の研究―』ダイヤモンド社、昭和十八年)である。

この書は私が戦後北大生の頃に札幌の古書店で何回か見かけた事があるが、残念ながら当時の農学部のある学生にとってはこの書を理解する力がなかつた事と、金のなかつたことのために購入していなかつた。目録作製の期間中にこの書の事を思い出し図書館から借り出し二〇年振りに拝読した。この書のいずれの論文も半世紀前に、一地方の産業をこれだけ細密に掘り下げて研究し

た論文は多くはない。もつと早く拝読すべきであったと後悔した次第である。

この論文集には、伊予絏(川崎)、今治綿業(大鳥居)、伊予和紙(増岡)、松前おた(賀川)、銀行合同(太田)、宇和島藩の財政と殖産興業(賀川)、宇藩経済辨(賀川)、三瀬諸淵の研究(住谷)の八論文が掲載されている。

この書は松山高商開校二〇周年記念論文集である。先生は前記したように一九三三年思想弾圧によって同志社を追われ、一九三七年松山高商に教授となられ、一九四二年七月まで在職しているから、先生の在職中に書かれ、この論文集が出たのは大学を追われた一年後である。何と情ない思いをしたことかと思われる。この論文作製についての御家族の方の思い出として御子息馨君に数年前に問うたところ、部屋中に一杯に関連の地図や図表を張付けて考察に長時間を費したようである。先生としては長く思ひ出に残る作品であったと思われる。先生から直接にその思い出を聞いて居なかったのは残念である。

先生の論文は直接に産業史をまとめたものではないが、伊予国宇和島藩出身の医師

で尊王開国論者であった三瀬諸淵(三十九歳で死亡)の動きを追及した論文である。

三瀬は一八六七年(慶応三年)五月十四日、召されて二条城に登り、徳川慶喜に謁して大政奉還を進言し、これを内側より指導し、戊辰戦乱のさなか、傷病兵が多く続出したの際に、大坂病院および医学校の設立に従い、また後に専売特許法の起草や、監獄制度改革等の立法に参与した人物であり、維新後の伊藤博文はその効に報い、陸軍軍医総監に推薦しようとする意があったが、名利に恬淡な諸淵はどこまでも純学者として終始せんことを希望し博文の勧告を辞退し、大阪医学校および病院の勤務に当り、医学生に教育に努めた人物であることを明らかにした。従来の研究によると大阪医学校兼病院の創設に関与したことなど、主として医学に関する貢献は評価されていたが、先生はさらに専売特許や監獄制度の改革に参与したことなど新しい見解を発表している。諸淵について先生以後の研究がどれだけ進んでいるかを、名声高い『国史大辞典』(吉川弘文館)でさぐってみたが、医学以外の指摘が全くないのは若い執筆者の勉強不足である。

先生の松山での五年間は精神的に苦しい時代であったが、諸淵の活躍を詳細に追及し、この論文の他に『開花』誌上に二論文、『松山高商論集』に一、『医海時報』に二、『土曜日』誌上に二論文と、合わせて七論文を発表している。

四

先生のもう一つの力作は一九六二年に出版された『河上肇』(吉川弘文館)であり、この作製に二、三年を要していると思われる。先生は東大生の頃に博士が発行していた『社会問題研究』の論文を読んで感激し、それからは本郷・神田・早稲田の古本屋を廻り博士の旧著をあさり廻った。『貧乏物語』や『近世経済思想史論』等にめぐりあひ先生の生涯を決定したと語っておられる。

先生は東大を卒業された時に、吉野作造先生から同志社大学法学部の経済学史の助手として行く気はないかと話があったが、わたしは柄でもないと逡巡されたが、吉野先生は「京都には河上君と佐々木君(惣一博士)がいるから紹介してあげる」とのことで、先生は意を決し行く気になり赴任し、

早々の四月に河上博士に経済学史について教を乞う旨の手紙を書いて出した。指定された日の四月二十一日の夜、博士を訪ね週一回原論の聴講を許された。この時をはじめとして、教壇における博士の印象はいまも鮮かに脳裡に刻まれたと語っておられる。

一九二八年に河上博士は京都大学の教授職を辞し著作と政治活動を続けるが、一九三三年検挙され東京豊多摩刑務所に収容され、一九三七年刑期満了し自宅に帰り、一九四六年一月三〇日生涯を終るのであるが、博士が出獄した時に先生は松山高専に居られたが、日本評論社から「近衛文麿と河上肇」という人物評論を求められ、先生は赤城和彦のペンネームで一文を草した。それが出獄直後の博士の目にとまって『自叙伝』第一巻に引用されている。

先生が博士に関する評論一五篇を採録して『思想的にみた河上肇博士』という著述を京都教研社から公にしている。

私は先生の著作目録の原稿を作製するのに、一九六五年の七月から十二月まで六ヶ月間を費したが、この間に力作の三瀬諸淵の論文を詳細に読むことが出来て嬉しく思

っている。先生は後日、著作目録が完了したことを大変によろこばれ、嬉しそうであったお顔が今だに忘れられない。

私が住谷先生にはじめてお逢いしたのが三七年前である。当時私は三〇代であったが、今年が停年を過ぎて四年がすぎた。同志社の卒業生ではないが、教師生活の大部分を同志社ですごしたので、今となつては同志社を忘れることができない。それと同時に住谷先生のこと忘れられない。

『同志社時報』から住谷先生の人物誌に就いての記述を求められたので、総長としての手腕も当然記述しなければならぬが、私にとつてはそのようなことを記述する能力がないので、主として学術上の業績を検討して稿を終えることとする。

●住谷悦治氏略歴●

- 1895年12月18日 群馬県に生れる
- 1918年7月 第二高等学校卒業
- 1922年3月 東京帝国大学法学部卒業
- 4月 同志社大学法学部助手
- 1927年4月 同志社大学法学部教授 (1933年8月退職)
- 1937年4月 松山高等商業学校教授 (1942年7月退職)
- 1949年7月 同志社大学経済学部教授
- 1963年11月 同志社大学総長 (1975年10月退任)
- 1987年10月4日 永眠